

## カリタス女子短期大学 卒業生の活躍

### 山口みどり (2006年卒業)

私は、去年の9月から今年の7月までフランスで留学生活を送りました。カリタスを卒業してからフランスに行くまでの間、カリタスで「留学パック」という卒業生対象のシステムを利用しました。(留学するまで、希望する授業を在學生と一緒に受けられます。)

週に1回通い、授業を受けながら休み時間に留学の準備に関する相談を先生方にしていました。稲葉先生、樋口先生、北垣先生からは、留学先の選択にあたりいろいろと助言をいただきました。ボグナール先生からは、ビザ申請のために仏文で書かなければならない書類の添削などをいただきました。先生方のお陰できちんと準備してからフランスに行くことが出来ました。心から感謝しています。ちなみに留学パックを利用した第1号は、私のです。授業が受けられ、先生方に留学の相談もできるこのシステムを今後、留学を考えている後輩たち又は、既に卒業された方たちにも是非、利用してもらいたいです。

モンペリエの語学学校の9割は、ドイツ語圏のスイス人でした。ドイツ語圏のスイスの学校では、フランス語が必修で小さい頃から勉強しているので、優秀な人たちばかりでした。来たばかりで、話すのも、聞き取るのも慣れていない私にとって、この中で勉強するのはきつかったです。でもだからこそ彼らの2倍も3倍も努力すべきだと、毎日必死に勉強しました。苦手だったことは、授業内の討論でした。お互いの国の習慣について討論したとき、日本はキスの挨拶ではなく、頭を下げて挨拶するなんておかしいと否定されました。私は不愉快になりながらも、逆にどうして貴方たちはキスで挨拶を交わすのかと聞きました。答えは、それは大事なことからでした。私は私で日本人にとって相手に頭を下げて挨拶することは、礼儀で大事なことからと言いました。口では簡単にお互いの文化や習慣を理解しあいましょう、と言えるけれども、実際は難しいです。

時にこういうことにぶつかりながらも徐々にフランスの生活にも慣れていきました。そしてすっかり慣れた11月上旬、同じ学校の日本人の方が、当時リヨンに留学していた2人の日本人の方を紹介してくれました。偶然にもそのうちの1人は、カリタスの先輩の小林恭子さんでした。カリタスの卒業生は、他の大学や短大に比べ少ないのに、その少ない中の1人と広い国、フランスで出会えた私は本当に幸せ者です。この奇跡的な縁を大切に、今も先輩とは連絡を取り合い仲良くさせてもらっています。

年が明け、2月からは、アンジェに拠点を移しました。私が通っていたアンジェ・カトリック大学では、様々な国の人たちと仲良くなりました。もちろん日本人の人たちとも。ちょうどカリタスの先輩の横井美穂さんが在籍中でした。彼女の寮にお邪魔させてもらうなど小林先輩に続き、またカリタスの縁による交流を深めました。カリタス女子短期大学は、小さい短大だけれども、繋がりは大きいと感じました。

5月上旬、思いもよらぬ出来事がありました。美術史と音楽史の両先生による企画で、オペラ座とオルセー美術館を見学しに行きました。オルセー美術館の団体専用の入り口の前で待っていたとき、私たちの後ろに突然黒い車が止まり、暫くすると車から、あのセゴレーヌ・ロワイヤルが姿を現しました。

彼女の周りにはあっという間に人だかりとなり、撮影大会状態となっていました。もちろん私もお願いし、一緒に撮ってもらいましたが、撮影中ずっと私の手を握っていてくれました。その時の感触は、



セゴレーヌ・ロワイヤル氏と

今でも忘れられません。彼女の印象は、エレガントで優しい人でした。大統領選直後にも関わらず、疲れた顔を見せず、笑顔で周囲の人たちに応対してくれました。次期大統領選に又立候補し、今後フランス初の女性大統領誕生となって欲しいです。

6月上旬から7月の帰国まで、ルーアンに行きました。ルーアンはジャンヌ・ダルクが処刑された町として知られ、モネの有名な連作でも知られるノートルダム大聖堂があるところです。

午前中だけの授業を受け、午後は毎日街の中を散歩しながら、ルーアンの歴史を感じていました。それはまた、この1年間のことをじっくり振り返る良い機会でした。この1年間、ここでは書ききれないくらいいろいろなことがありました。日本を長くはなれ、日本のよいところも悪いところもたくさん気付かされました。また辛かったとき、親身になって話を聞いて励ましてくれたのは、日本人の人たちでした。話をすると結構同じ国の人同士、同じことで悩んでいることが多いと分かりました。留学したからって、日本人を避けることはないです。

私はこれからも、フランス語の勉強を続けていきます。フランスに1年留学したと言っても完璧に話せるようになるわけではなく、ましてやこれで終わりでもありません。あくまでも留学は、1つの過程です。私のフランス語力、フランスに関する知識もまだまだです。何よりも続けていくことが大事だと確認した1年で



誕生日会

「部屋に戻ると、寝台の前に崩折れて、ジャックは睫毛の間に張りつめていた涙の塊をどっと押し流した。この涙の天眼鏡が、いままで彼に奇怪な世界を見せていたのだった。」

(ジャン・コクトー『大股びらき』(澁澤龍彦訳)より)

主人公ジャック・フォレストイエはジェルメエヌという女性に恋をした。彼女は、丁度花好きの人が、一つの花が萎れてしまうと、すぐに別の花を購うように、新しい恋を次々と咲かせていくような女だった。ジャックの抱く恋心は、しっかりと根ざし、その進み方はゆっくりとしていて、彼は相手の中にある多くのものを愛した。ジェルメエヌは自分を愛してくれる相手だけを愛した。無論ジャックのことも愛したが、二人の間にはどこまで行っても埋められない距離があった。ジェルメエヌは、ジャックとの恋が初舞台ではなかったのだ。この恋は最初から勝負付けが済んでいる試合だったのだ。当然のごとく、ジェルメエヌにとって萎れた花となったジャックは棄てられてしまう。

「われわれの人生は折りたたまれているので、中をつらぬく一本の大きな道は、我々には見ることができない」とコクトーは言う。なるほど、青年ジャック・フォレストイエの一瞬の恋もこの大きな運命の道に導かれたありきたりな恋であり、その恋の破局にいたってジャックが流す涙の塊もまた、いつかは溢れ出るように定められた涙だったのだ。破滅を待つ間、ひたひたと溜まった涙はガラスの結晶と化し、ジャックがその結晶を通して眺める世界は、涙が堰を切ると同時に、ありきたりな現実に戻り始める。天眼鏡とは、不可視のものを覗き見ることが可能にしてくれる道具だが、ジャックは本当は見るべきでないものを覗いてしまったのかもしれない。

この小説の原題 *Le Grand écart* とは、バレエ用語の「スプリッツ」(一直線に両足を広げて床に座る動作)の意味も持つ。運命の中で、ジャックは初舞台でこの「スプリッツ」を試みるが、それはあえなく失敗に終わる。『大股びらき』には、読むものの心をえぐる苦悩や、甘い感傷の入り込む余地は微塵もない。コクトーは、隠喩、換喩をふんだんに鏤めて、ポエジーというヴェールで凡庸な現実を、美しい観念の工芸品に仕立て上げたのだ。

俳人塚本邦雄に『けさひらく言葉』という著作があります。古今東西の作家達の作品からお好みの一文を引用してそれに解説を加えるという体裁で、昔から引用句を自分なりに集めるのが好きだった私は今でも時折この本を繙いています。元来、文学好きとはいっても、ある作家の全体像とか、思想的役割だとかには皆目興味が無く、また大上段に構える哲学が肌に合わない私にとって、文学とは、詰まるところ、本の中にある洒落た言葉に象徴される細部に拘ることだったのかもしれない。その意味で自分は正統な文学読みとは言えないのではないかと思います。

さて、この度情報誌「リエゾン」に一文をとの話があって、文学作品の引用を手がかりに何か一言書き付けてみることにしました。その時先ず頭に浮かんだ作家がコクトーだったのですが、かつてラルースから出ている「引用辞典」を繙きながら、「私はいつも真実を語る嘘つきである」などという、人を煙に巻くような彼一流の「殺し文句」に完全にいかれてしまった学生時代をふと思い出した次第。

最後に、澁澤龍彦がこの『大股びらき』の翻訳を世に問うたのは若干25歳の時でした。澁澤、コクトーという日仏の稀代のスタイリストの幸福な出会い。その美しい結晶を是非皆さんにも手にとって味わっていただきたいと思います。

## Information 1

井上喜美代さん(仏語科2期卒業)は、以前から司会やナレーションなどで活躍していらっしゃいますが、現在、ラジオ日本(1422MHz)で、毎週火曜朝10時から10時10分まで「井上みよのかわさき元気トーク」という番組のパーソナリティーを務めています。過去の放送分もネットで聴くことができますので、皆さま、井上さんの元気な声を聴いてみてください。

## Information 2

飯田盛子さん(2007年3月卒業)は、この4月より編入学先の京都外国語大学外国語学部フランス語学科三回生、学内のコンテスト 第十二回「関西学生仏語暗誦大会」2回生以上の部に参加。見事第二位に輝いた。編入学した後も、活躍されている卒業生が大勢いらっしゃるのには、感動。飯田さんも他の方々も Bonne continuation !!!

## Information 3

市民大学(フランス女性たち)は、70名の受講生を迎えて、9月29日に開始、ポグナル先生の記事にもあるように、「愛の讃歌」のピアフの講演もあります。毎回、卒業生も10名くらい受講生の中に見受けられますが、このような講座の受講生は、カリタス短大の図書館も利用できます。こういうオープンカレッジ委員会主催の講座のお知らせは、短大ホームページでご覧いただけます。

### 横井美穂（2年在学中）

私は2006年10月から約1年間、派遣奨学生としてフランスの西部に位置するアンジェで、勉強しました。多くの事を吸収しようと意気込んでいった私でしたが、フランス語だけで授業を受けることは想像以上に過酷で、また他の学生の反応の速さに圧倒され、自己嫌悪に陥り、授業に *participer* ではなく *assister* するだけの日々が続きました。自分の無力さを知り、根拠のない自信など、跡形もなく砕け散ったのです。しかし、負けず嫌いの私はこれではいけないと、日本人との接触を避け、外国人の友達をたくさん作り、日常でもフランス語だけを聞き話す環境に身を置く事にしました。そうすると自ずとフランス語を話す緊張感や、集中しなければ聞きとれないという状況は、軽減されていきました。興味深かったのは、特に中国・韓国人との会話です。みなアジア人ですが、ある国では反日感情や政治的問題が残されていたり、日本ではメディアによって切り取られたマイナスな一面しか見ていなかったりと、互いを誤解している部分が多くあったようです。改めて日本を客観視する機会になり、相手国を認め、理解し、歩み寄ることができました。

初めての授業で、私を西洋美術の世界に魅了した先生との出会いがありました。かの有名なルーブル美術館やオルセー美術館には、幾度となく足を運び、美術史のノート片手に、何時間もかけてまわりました。また実際にその画家ゆかりの地まで足を伸ばして、その画家達の生き方に少し近づけた気がします。特に心を惹き付けたのは、

印象派画家のクロード・モネのアトリエがあるジヴェルニーです。パリから距離的には少ししか離れていないにも関わらず、見渡す限り緑に囲まれていて、モネの



Giverny 庭の中心

手法を手取るように感じる事ができました。モネは日本をこよなく愛していたこともあり、アトリエの壁にはいくつもの浮世絵が飾られ、庭には日本橋という太鼓橋がかけられていて、日本人であることを心の底から誇りに思いました。

5月16日に行われた選挙は、移民2世と初の女性有力候補の対決という前代未聞の選挙となり、期待が集まりました。授業で候補者の経歴や公約を学び、自分がもしフランス国籍を持っていたら、どの候補者の公約に賛同し投票するかを、新聞・テレビなどのメディアを通して考えました。これを機に、同世代のフランス人と今回の選挙や未来のフランスについて意見交換ができたことは、語学力向上だけでなく、日本人の若者の政治への関心も高めていかなければならないと思いました。結果、サルコジが大統領になり、今フランスに残されている問題がどのように改善されていくのか、行く末を見守りたいと思います。そして偶然パリで、2回目の選挙直後、私が支持していた

ロワイヤルに会い、選挙権のない外国人の私とも快く話してくれ、思い出に残る1枚を撮ることができました。

6月末にアンジェでの留学生生活を終えた後は、パリに本部のあるエマウス (Emmaus) というボランティア団体の活動に参加しました。



セゴレーヌ・ロワイヤル氏と

日本にも Emmaus は存在しているようですが、私自身は、今年1月の創設者 Abbe Pierre の死をきっかけに、Emmaus という名前を初めて耳にしました。高校生の時にボランティア活動に参加していたのでこの活動に大変興味を持ち、参加を決意し、不要になった洋服や靴の仕分けをしたり、骨董品に値段をつけて売ったりという手伝いをしました。Emmaus では不法滞在者や、Emmaus に所属しているお陰でフランス国籍を取得できた元外国籍の人、障害のある人など、それぞれ違った状況に置かれた、様々な人種の人々が働いており、小さなフランス社会を見ているようでした。「相手が不法滞在であろうと、困っている人を助けるのが Abbe Pierre の教えであり、Emmaus の仕事」と言った、1人の関係者の言葉が印象的です。その時、サルコジ大統領の演説にあった「移民の選択」を思い出し、今まであまりイメージの湧かなかった移民問題が、一気に近くなったように感じました。この状況から見ても、移民問題を語らずして、フランスは語れないと思いました。観光では見ることができなかった、本当のフランスの姿を見たような気がします。

渡仏前からフランス各地の方言やアクセントの違いに興味を持っていたので、8月はエクサン・プロヴァンスで、1ヶ月間語学学校に通いました。エクサン・プロヴァンスは南仏らしく、太陽がさんさんと降り注ぎ、古くはブルジョワ階級の人たちが住んでいた、落ち着いたおしゃれな町で、同時に画家ポール・セザンヌのゆかりの地でもあります。南仏なまりは学校で習い、頭では分かっている、実際のアクセントは違う単語に聞こえてしまうほど聞き取りにくく、道ひとつ聞くのにも大変苦労しました。少し足を伸ばして、車で30分ほど行ったマルセイユでは、人種も肌の色も町の雰囲気も全くエクスとは違い、またパリと同じフランスとは思えないほどでした。以前、マルセイユの人々はフランス人であるというより、Marseillais マルセイユ人である事を誇りに思っていると聞いたことがありますが、それが現地に行ってみて、理解できました。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださった神様、先生方に深く感謝いたします。そして家族、友人の助けなしには、この1年を乗り越えられなかったと言っても過言ではありません。またカリタス小学校から始めたフランス語が、生きたフランス語として多くの人との出会いを導いてくれました。これからもこの実りある留学を糧として、成長を続けていきたいと思ひます。

